



川 村 貞 夫

日本医学図書館協会会長

東邦大学医学部図書館館長

近畿病院図書室協議会の皆様方、設立20周年を心からお祝い申し上げます。

人それぞれに歴史があるように、いずれの「会」にもそれなりの悲喜こもごもの歴史があるわけで、20周年には大変な意味が含まれていると思ひ、心から敬意を表するとともに、ますますの発展を期待し、祈念するものであります。

さて、病院図書室に寄せる私の思いは格別なものがあります。それは私がある社会保険病院に、現在もお第一線の病理医として出張しており、図書の少なき故に診断に困難を感じる事がしばしばあるからです。このことは会長就任演説と、「医学図書館 (Vol. 41 No. 3)」の中の会長所信表明の一部で言及されております。

医学図書館がどのように発展できるか、またするべきかが真剣に問われている時代に、記念号「病院図書室に求められる新たな機能」まさに機を得た問いかけであります。

市井の病院図書室の対象者はどなたでしょうか。そこで働く医師をはじめとする医療関係者のみですか。私は患者も、その家族も、あるいはまた周囲の地域医療関係者も含まれてもよいのではないかと考えています。すなわち開かれた図書室の将来像であり、大きな目的の一つと考えます。

それでは、何を、どのようにしてそれらの人に伝えるか。これに関しては新米の協会長の私よりも皆様の方がよくご存じの筈です。

「どのように」については今の高度に発達

してきた情報機関を無視して語ることはできません。医療情報を従来の成書に求める方法は、成書が完成されたときには古くなっていることから、十分な方法とはなり得ません。どうしても情報のオンライン化が必須となるでしょう。ごく最近そのことについて、極めて示唆的な座談会が掲載されております(週刊医学界新聞第2111号)。司会が前協会長の開原成允東京大学教授(附属病院中央医療情報部長)です。論題は医学知識のオンライン化と、今我々が知りたい点が易しく解説されています。その中で偶々私が所信表明のなかで言及している点が前原先生の口からも語られています。すなわち、「電子メールで世界中と手紙のやりとりができますし、医学関連のデータベースとしては、薬剤情報、中毒情報、医学雑誌特集記事、看護計画などのデータベースの他に、外のデータベースとの中継もできるようになっています。今年で大学病院のネットワークは完成しますので、今後はこれを開業医の方々にも使えるように制度を検討していくことになると思います」。このように情報提供側では着々と準備ができつつあるのです。

問題は、今やこれを受け、利用する側の準備が要求されている時代になってきていることです。皆様方の病院図書室ではどのように対処されようとしているのでしょうか。特にこれにかかる費用をどのようにしようとなさっているのでしょうか。最後に申し上げたいのはこのことで、病院執行部の理解の仕方

です。

医療情報オンライン化に乗り遅れないようにするためには、皆様方のそれに対する正確な知識と情報処理能力、およびたゆまない説得への情熱が、如何に病院執行部を動かすかにかかっています。執行部だけではありませ

ん。医局の先生方の助力を得ることも大切です。

この不景気な世の中にあって、医療最前線の一端を担う皆様方のご奮闘を心から期待しております。私も素人ながら皆様とともに歩んで行きたいと思っております。